

【中国】

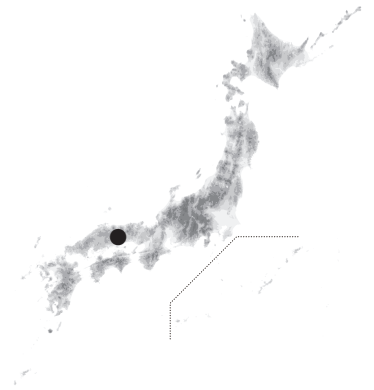
竹枝地区の「生きものの里づくり」

～地域×学校×生きもの～

地 域：岡山県岡山市建部町竹枝地区

実施主体：竹枝を思う会、岡山市立竹枝小学校

報 告：岡山の自然を守る会 友延栄一



1. はじめに

岡山市建部町竹枝地区は、岡山市北部、旭川に沿った盆地に位置する人口755人、小学校（竹枝小学校）の児童数30人（平成21年5月1日現在）の市内で最も人口の少ない小学校区です。2007（平成19）年に建部町が合併し、岡山市になりました。里山と旭川に囲まれた中に田畑と集落が点在している里地里山地域です。竹枝地区は、地区ごとの祭りが残り人々の絆の強い地域ですが、近年、人口が減少し、昭和40年代に100人を超えていた小学校の児童数も減少しており、地域、そして小学校の明日を考えると、今何かしなければならないという思いが地域の方と小学校双方から湧き上がりました。

そのような背景をもとに、2006（平成18）年、小学校と地域住民が協働で、子どもたちに“ふるさと”を伝えていこうと「竹枝を思う会（以下、思う会）」が結成されました。思う会では、ふるさとの良さを伝える協働事業や、学校支援ボランティアなどを行い、持続可能な地域づくり、人づくりをめざしています。

2. 学校前の荒れた河原を「水辺の楽校」に

竹枝小学校の校章は、学校を6匹のホタルが囲んでいます。その校章のように、この地域ではホタルが多く生息しています。旧建部町にはホタル保護の条例もあり、かつて小学校でホタルを養殖するなど、環境学



竹枝小学校

習の柱にホタルをすえた活動が行われてきました。

しかし、思う会の活動が始まる前の2005（平成17）年当時、目の前の旭川の河原は草が生い茂り、子どもが近づける状態ではありませんでした。地域の中高年世代は、川で遊び、その楽しい体験を持っています。学校前の恵まれた環境をもっと子どもたちのために活かしたい、そして、自分たちももう一度楽しみたいという思いを持っていました。

そこで、最初は思いを持つ人数名からでしたが、竹枝を思う会の結成の頃からは組織的に草刈りをはじめ、竹を切り、水辺に近づけるように整備を始めました。そして、2006年3月から、思う会が中心になって、「たけえだ水辺の楽校」の活動が開始されました。「たけえだ水辺の楽校」は、国土交通省や自治体が整備したものではありません。地域の人が勝手に名付けて、子どもたちのためにはじめたものです。竹枝地区

の自然や地域で培われてきたくらしの知恵を体験する活動を、ほぼ毎月1回実施しています。例えば、自然の宝物さがし、ホタル狩り、河原キャンプ、川遊び、アユ漁体験、裏山たんけん・・・が実施され大人も子どもも楽しんでいます。主に地域や小学校の方で運営されていますが、テーマによって地域外から専門家が応援団としてかけつけています。2008年には、国土交通・環境・文部科学省の「子どもの水辺」への登録もされました。

3. 「旭川かいぼり調査」

この「水辺の楽校」による楽しい体験活動を基に、そこで子どもや大人たちから出てきた気づきや疑問に答えるために、地域のことを調べる活動が行われています。地域の方や小学校の学習活動により、昔の川遊びの証言集をまとめたり、ホタル生息調査を行い、冊子にまとめたり地域で子どもたちが発表会を行って調査結果を地域で共有しています。

しかし、地域の素朴な疑問の中には、大人でもどうやって答えを出したらいいかわからないことがたくさんあります。2006年のある時、子どもたちは、「漁協の人は旭川の底が固まったからアユがとれんと言うとるけど本当か。川の底は本当に昔と比べて固まってるんか？」と疑問を持ちました。それは、大人にとっても、これから川を良くしていくために知っておきたい問いでした。

思う会では、子どもたち、また自分たちの疑問に答えるため、川を堰き止めて干上がった川の魚を拾う「かいぼり」で、川底の石の隙間にすむ「てっきり」という魚

(標準和名アカザ)の数を数えて川の健康度を調べようと思いつきました。3年計画です。しかし、対象の旭川は、県管理の一級河川で、一部とはいえ干す区間は、川幅20m、長さ200mあります。川を堰く技術に関しては地元業者が持っており、漁協や地域の調査参加者の協力は得られる目途がありましたが、河川利用上の行政手続きや、そもそも、川の健康度を判断する科学的な調査方法が地元だけでは困難でした。そこで、地域外の応援を募ることになり、私のところに相談がありました。それは、思う会の事務局担当者と岡山山の自然を守る会の活動で古くから知り合いであり、併せて当時、岡山市の岡山ESD推進協議会の担当課(環境保全課)職員だったためです。

今までにやったことがないことでしたが、環境教育や調査活動として、また企画自体が魅力的で、興味を持って協力してくれる方がたくさん現れました。調整の結果、河川管理上の課題は、主催に自治体(当時は建部町)が入ることでクリアし、調査については、岡山理科大学や岡山淡水魚研究会などで調査体制を整えて実施することになりました。

調査は、「旭川再生プロジェクトーてっきり復活大作戦2006ー」という名称で、2006(平成18)年11月4日、建部町(現・岡山市建部町)吉田地先の旭川鹿瀬橋下流左岸の約200mの区域で行われ、参加者は、地域住民を中心に岡山理大の専門家、市民団体などで約400名にのぼりました。

2時間の調査の結果、アカザ606匹ほか、カワムツ、ウナギなど25種の淡水魚が見つかりました。調査の結果、アカザを多数確認でき、川底も浮き石が多く、比較的良好な環境であるということがわかりました。最後に



水辺の学校「自然の宝物さがし」



旭川のかいぼり調査

この成果は、他の専門調査も含め2010年3月に調査報告書にまとめられました。また、地域では引き続き、かいぼり調査で築かれた地域外の研究者との関

このツアーでまとめた情報をもとに、「身近な生きものの里」の指定を活かした地域づくりについて、2009年度は具体的なイメージと目標を定めました。計画では、①竹枝小学校を「生きものの里」の情報発信拠点として位置づける。②旭川を中心に、矢淵川、農業用水



路、学校田を結び、裏山を含めて竹枝小学校を「生きものの里」のセンターにする。ことなどが示されました。

まず、竹枝小学校の情報拠点化は、情報の蓄積と学習・展示の充実が目標です。展示については、2008（平成20）年に岡山理科大学学芸員課程の学生たちがアカザの模型などを作成し、校内にミニ博物館を開設しています。2009（平成21）年は、ホタルの模型を作製するとともに、学校のホタル学習への協力を行いました。

周辺の生きものの生息環境は、現在、河川と田んぼと水路の分断や、ヘイケボタルの減少など問題があります。そこで、2009（平成21）年10月31日に、農村バイオトープの専門家・和歌山大学の養父志乃夫先生を招いて開催しました。参加者は約35人、地区および小学校の関係者と、岡山理大の教員・学生、地区外の参加者が半々でした。

地域の人が取り戻したい自然環境のイメージは、学校の校章が表している6匹のホタル（すなわち、自分たちが親しみ利用してきた生きもの）で学校の周囲が囲まれている環境です。前述の通り今でも自然豊かな地域ですが、地域の人から見ると、昔に比べたら悪くなっており、6匹のうち3匹しか光っていない状態だそうです。

勉強会では、「生きものの里づくり」についての簡単な構想発表の後、学校周辺の旭川、支川の矢淵川、ため池、プール、水路、学校田などをみんなで点検し、地域の思いと専門家の視点を重ね合わせて地図にまとめました。

結果、河川と支川の流れの分断に対しては、①合流



改善計画が書き込まれた地図

点に池（ワンド）をつくり、冬季の魚のすみかにする。②学校田を冬水田んぼにすることでヘイケボタルの生息環境をつくる。③プールに産卵するアカガエルの生育を助ける方策を考える。の3点をすぐにでも実施

しようという話でまとまりました。

この勉強会の後、まとめた内容に基づいて「生きものの里」づくりの活動は動き出しました。11月初旬に、まず、水路から学校田への冬期通水が始まりました。続いて、矢淵川と旭川の合流点へのワンド造成は、竹枝を思う会が、県から河川法第20条に基づく承認を得て、住民が自ら重機を使って河川維持工事を行い2月に完成しました。かいぼり調査での3年間の河川作業の実績で信用を得ていることが幸いして、市民主体の河川整備が実施できました。

5. 地域×学校×生きもの ～これからに向けて～

このように4年間で、地域の自然に親しみ、生きものの保全、復元につなげる取り組みは、一つ一つ形を見せてきました。そして、生きものを通じた取り組みにより、竹枝地区の魅力を発信してきました。

その活動のおかげで、竹枝の活動に参加していた地域外の家族が、竹枝地区に移りすむという明るい話題がありました。「自然の中で子育てするなら竹枝が一番」という魅力を発信して、子育てしたい家族の定住促進を進めたい地域にとって、願ってもないことです。

しかしながら、小学校の児童数の減少に歯止めがかかっているわけではありません。「たけえだ水辺の楽校」や「旭川かいぼり調査」などの取り組みが外部から高く評価されても、現時点では、それが必ずしも学校の存続や地域の活性化につながっていないということに対する危機感、不安があります。活動スタッフも年を取っていきます。草刈りなどの維持管理活動にも外部からの応援が欲しいということで「地域づくりサポーター」の募集が始まりました。

竹枝地区の中で、生きものの里づくりは、様々な課題や活動の中の一つです。私は、その一つの面に関わっているだけの地域外部の一人ですが、竹枝小学校や竹枝の魅力に取り憑かれています。岡山理科大学の学芸員課程の教員をはじめ、そのような地域外応援団は増えていますので、関わりの範囲を単なる調査活動から教育、維持管理活動へと拡大していくことが、地域からは期待されていると思います。地域の

期待に応えられる面もありますが、地域外の人、特に学生にとって、応援するだけではない双方による関係が必要です。大学や学生は「調査活動のフィールド提供」を受けて、「調査結果の地元への還元」がされるとWin－Winの関係でしょう。このような関係を生きものを通じてどれくらい広げていけるのでしょうか。

また、学校に関していえば、旭川に最も近く、里山も水田も近い環境は、竹枝の子どもたちだけでなく、市域全体の子どもたちにとっても有意義な教育資源だと思います。竹枝でなければ得られない環境資源を

市域および広域の子どもたち、また、地域づくりサポーターとして関わってくれる大学生や高校生などの教育に活かせる可能性があります。

私たちは、地域、学校、地域外応援団それぞれ違う立場で竹枝の生きものの里づくりや学習に関わるようになりました。この関係をこれからも活かしながら、地域×学校×生きものをつなぐ活動が成果をあげ、そこから関係を広げていくことが、持続可能な地域づくりにつながっていくのではないかと考え、これからも活動していきたいと思っています。

表 竹枝を思う会・たけえだ水辺の楽校の実践（2006～2009）

2006	・竹枝を思う会の結成
	・水辺の楽校など学校と地域の協働事業開始
	・水辺の楽校が岡山ESD活動推進団体に指定される
	・旭川かいばり調査を提案、多様な団体の協働により実施
	・かいばり調査の報告書を岡山市（環境保全課）が発行
2007	・岡山市のホタル調査に学校と地域が協働して取り組む
	・水辺の楽校を中心に、学校周辺の自然や生き物の情報を着実に蓄積
	・「いい川、いい川づくり全国大会（東京）」で水辺の楽校の取り組みみを発表、入選
	・第2回旭川かいばり調査を地元団体として共催。新たな成果を生む
	・岡山ESD活動発表交流会で事例発表、特別賞、市長表彰を受ける
	・学校前の旭川が、文科省、環境省、国交省連携事業の「子どもの水辺」に登録
	・活動報告書「ふるさとを伝えたい!」を編集発行。地区全戸配布。
2008	・水辺の楽校の活動、「竹枝っ子通信」の発行を年間を通じて継続
	・環境省のモニタリングサイト1000里地調査を受託（5年間継続）
	・吉田地区が行う「農地・水・環境保全対策」事業（5年間継続）と連携
	・昔の川遊び調査を実施。川の文化祭開催
	・PTAの協力で土師方川の水辺整備
	・岡山市の「身近な生き物の里」の認定
	・第3回「旭川かいばり調査」に協力
	・岡山理科大学の協力で小学校に「ミニ博物館」開設。
	・「身近な生きものの里」認定記念イベント「ふるさと再発見ツアー」実施
	・活動報告書「ふるさとを伝えたい!2008」を編集発行。地区全戸配布。
2009	・水辺の楽校の活動、「竹枝っ子通信」の発行を年間を通じて継続
	・生きものの里づくりに向けたワークショップ開催。
	・第4回「旭川かいばり調査」に協力。
	・生きものの里づくりの実践開始。岡山県の承認を得て矢淵川河口部のビオトープ造成を地域で施工 ・「山陽新聞桃太郎賞」を竹枝小学校受賞

注 竹枝を思う会・たけえだ水辺の楽校「ふるさとを伝えたい!2009年度報告書」を筆者が修正